

(2) 「課題研究」の取組（第2学年全員履修）

今年度、「課題研究」については、計画したアウトラインに則り、第2学年の生徒全員に取り組みさせることができた。途中、コロナ感染拡大防止対策として奈良県立高校全体の夏期休業期間が延長になるなど、進捗しづらい状況も生じたが、生徒たちには研究課題の設定から、中間発表を経て、最終のポスター発表及び振り返りレポートの作成まで取り組みさせることができた。昨年度は、臨時休校期間の影響により、その後の教育活動に制約が残る中、「課題研究」については計画を見直し、中間発表までを一つのゴールとした。当然のことながら、進捗は予定より遅れ、指導面・運営面において乗り越えるべき課題があった。ただ、生徒たちには進捗の遅れへの対応に多くを費やすのではなく、研究内容に対する豊かな知識と、その成果の発展性、将来への見通しをもつことを大切にさせる指導を行った。この時の考え方が、事業最終年度にあたる今年度の計画遂行に活かすことができた。研究過程における学びの過程こそが肝要であるという姿勢で、教員は指導に臨めた。これは、本校の「課題研究」で重視している「過程の充実」に基づくものであり、この考え方が学校全体に浸透しつつあると言える。以下に、今年度重点的に取り組んだことを記す。

【今年度の重点項目】

- (ア) 共通ワークシートの改訂～動機の言語化及び論理的表現力の育成～
- (イ) 担当者会議の運営の効率化
- (ウ) ポスター発表形式による「課題研究発表会」の実施
- (エ) 学校設定科目「課題研究α」
- (オ) 事業終了後の自走に向けた課題の整理

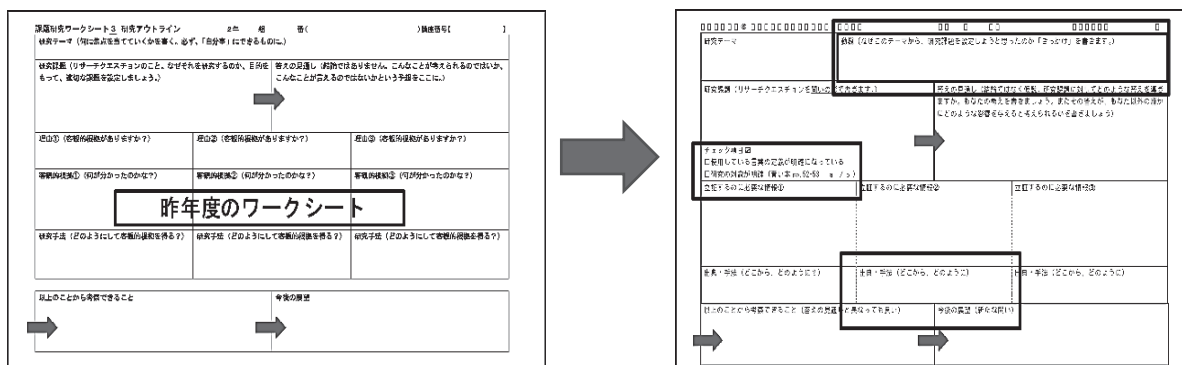
1 実践内容

(ア) 共通のワークシート及び指導案については、昨年度から種類を精選し、その数を3分の2程度まで減らした。またそれぞれに用いていた文言等にも改訂を加えた。改訂の主な目的の一つ目は、「動機の言語化」である。本校は1人1テーマを原則に研究課題を設定させており、選んだテーマから研究課題を設定した理由を具体的に言語化させることで、設定した課題について、生徒がより強い「当事者意識」をもち、主体的に課題研究に取り組めるものと考えた。昨年度は「なぜそれを選ぶのか」といった「理由」を記入させていたが、「理由」を尋ねると、中には、「面白そうだったから」「不思議に思ったから」といった表現にとどまり、教員の期待とは異なるアウトプットで終わってしまった生徒もいた。そこで今年度はワークシートの文言を「理由」から「動機」に変更し、ワークシートの様式も、生徒に記入を促すような形に変更した。このことにより、昨年度は、本人の中で言語化が完了されてしまい、「自分の域」を超えずに、課題研究への取り組みが完了した生徒もいたが、今年度は「なぜそれをするのか」という点について、生徒自身が経緯などを自分の言葉で語るできるようになった。3学期には、ほぼ全ての生徒が動機を明確にした状態で、ポスター発表に臨めた。ワークシートを用いて思考を整理しながら、担当の教員や仲間との対話を通じて、生徒たちは自身の研究課題を「自分事」と捉えている様子が見られるようになった。特に地域課題に向きあう場合は、ややもすれば一方的な提案で終

わってしまうケースもあると考えられるが、「高校生の自分に何ができるか」というところまで、具体的に掘り下げて考えられるようになってきている生徒の姿が多く見られた。このことは、2月に実施した課題研究発表会の際に、指導助言者からも評価を頂いた。

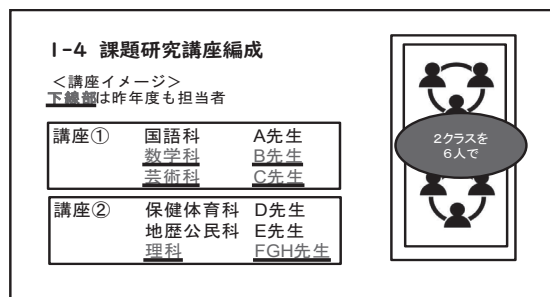
改訂の二つ目の目的は「論理的表現力」の育成である。研究課題に対する答えの見通しを論理的に立証するには、客観的根拠が必要である。昨年度は、根拠を揃える過程において、生徒は手に入れやすい情報を中心に、一つの情報源だけを頼りにして、客観的根拠の全てとってしまう傾向が見られた。そこで今年度は、「少なくとも3つの出典を目指す」ことを共通目標とし、情報源及び手法が偏ってしまわないようにした。例えば、生徒たちはインターネット検索により、多くの情報を得ようとする傾向はあるので、新聞記事や書籍の利用も促すなどしている。担当教員が「新聞記事」を紹介などすることで、それがきっかけとなり、過去の新聞記事を検索した生徒もいた。また図書館とも連携し、テーマに関わる書籍の充実をはかっていることもあり、司書に文献検索の助言を求める生徒も増加している。今年度、特徴的だったのは、インタビュー調査やSNSを利用したアンケート調査など、研究手法の種類が昨年度より拡がりが見られたことである。Google Formなどを上手く利用しながら、アンケートを実施する生徒も複数おり、「異なる出典を少なくとも3つ」というシンプルな目標設定が、研究手法の拡がりにも良い影響を与えているのではないかと考える。具体的な動機に、偏りの少ない客観的根拠が加わることで、生徒たちは昨年度より論理的に自身の研究を表現できたのではないかと考える。ただし完全に情報源の偏りが解消できたわけではなく、手法の指導については、教員の指導だけでは難しさも感じているところもある。その中で、特に「データ」の扱い方は課題である。統計グラフや表から必要な情報を正確に読み取る力や、その原因を考察して表現する力の育成については、課題研究の取組の中で指導を閉じてしまうのではなく、教科「情報Ⅰ」ともうまく連携しながら、具体的な指導を展開していく必要がある。また「データの利活用」について、教員も研鑽を積む必要性を感じる。(ワークシートについては第4章資料編P.85に収録)

○ワークシート改定例



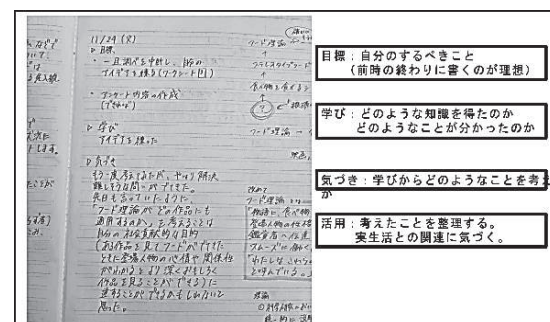
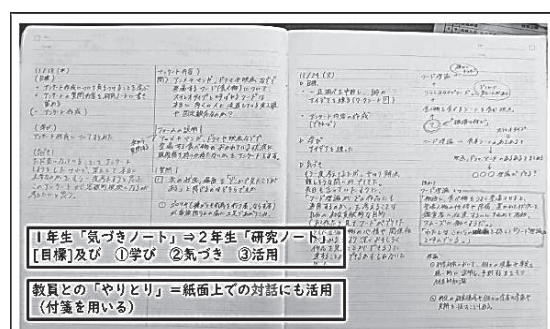
(イ) 授業担当者会議

今年度は第2学年の生徒を29グループに分け、授業担当者が一人当たり12名～13名を担当した。教務部とも連携し、原則クラスを3分割し、3つのグループを作り、3つのグループを合わせたものを「講座」と呼び、教員3人でその講座を指導する体制とした。また同時間帯に、もう一つ「講座」を開講することで、教員6人で2つの講座を指導できる仕組みとしている。



右の図は講座イメージ図である（第2回運営指導委員会資料より）。オリエンテーションなどでは講座全体で指導をし、中間発表などの場面では、グループを解体し、新たなグループ編成するなど、一人の教員が指導を抱え込んでしまわないように、また異なる視点をもった立場から助言ができるようにしている。生徒のテーマによっては、グループや講座間の移動を可能とし、今年度も、年度途中に実験室希望を申し出る生徒もいるなど、数名の生徒の動きがあった。令和4年度入学生より開設する「理数探究」の開始を見据えて、今年度は物理・化学・生物で構成される「理科」グループを編成している。主に実験室を利用しながら、自然科学系のテーマを選択する生徒に向けたものであり、先述の実験室希望者にも、可能な限り柔軟に対応している。「課題研究」の取り組みが2年目を迎え、昨年度の授業担当者と初めての授業を持つ教員を、同一講座で指導できるように組み合わせることにより、互いに指導方法について、また生徒の様子について相談できる環境が整いつつある。

授業担当者会議の場では、共通のワークシートに加え、指導案及び、その時期に応じた「目標、目的」を確認するようにし、大きな齟齬なく、計画していたアウトラインに則り、年間計画を遂行することができた。指導経験の有無に関わらず、誰もが「課題研究」に関われる体制づくりをしている。約30名の教員全員が研修の機会をもてるように、定期的に授業担当者会議を開催し、短時間・同内容を複数回で実施するようにした。このことにより、授業担当者間での共通認識を図ることができ、先の見通しを立てやすくすることができた。今年度は一部の指導案をPowerPoint等で提示することで、生徒への指示が円滑にできるようになるなどした。授業担当者からの授業後のフィードバックは、運営側にとっては、貴重な声であり、それらを活かしながらワークシートの改訂や指導案のブラッシュアップに継続して取り組んでいきたい。生徒全員に作成させている「研究ノート」(右図)の充実については、その活用の仕方に工夫が必要と思われる。生徒対象に実施している意識調査では、「研究ノートを自身の研究にうまく活用できて」と回答したものが、11月時点で5割程度、2月の時点でも約6割である。記述の指導だけでなく、どのように活用すれば良いかについて、どの



ような助言が必要か、指導の過程を整理したい。また次年度入学生徒より、BYOD 導入が始まる。1年生に持たせている「気づきノート」（課題研究実践においては「研究ノート」）の活用の仕方については、項目の見直しも含めて、発展的に継続していけるように活用方法を再検討しているところである。

担当者会議や、実際の指導を通じて、教員の「伴走者」としての認識は全体に浸透しつつある。その中で、指導の上での課題は明確にし、改善する必要があると感じている。学校外の有識者等へ生徒がアクセスする姿勢の育成等、「情報の媒介者・中継役」としての役割についても、今後研修等を通じて認識を深めたい点である。以下に、実際に今年度の授業担当者の感想を掲載する。

○授業担当者の感想（令和4年2月アンケートを実施）

- ①教科（指導1年目、指導2年目）②伴走者として気がついたこと ③生徒の変容
- ④分掌の仕事・専門教科の指導への影響等

〈教員 A〉

①数学（指導1年目）

②自分自身が力不足で、最初は、「伴走者」の意味合いを何となくでしか理解していませんでした。今までも、教科の授業では、生徒たちと一緒に授業を作っていくことを意識しながらやっていた感じがあったと思うのですが、LHRなどの活動では、教師側からの一方的なものがほとんどであったように感じています。こちらからの一方的な話し方は、伴走するよりも楽ですし、自分の中だけで勝手に納得している部分が多いように思います。今回、課題研究で、伴走者として、個々の生徒たちと一緒に考えていくことを経験して、今までにはない経験ができたと感じています。伴走者だと、ひとつのことをやるにしても時間がかかりますし、また、こちらの知識がなければ、なかなか上手くいかないこともあると思います。ただ、そのときは、背伸びせずに、生徒と一緒に調べて、そこで感じたことを話すように心がけました。講座の生徒全員が、そうとは思わないですが、何人かは自分なりの答えを見つけてくれたのかと感じています。

③最初は、何をしたいのかわからず、戸惑っている生徒も多かったです。ただ、スキルを習い、自分自身の中で答えを導かなくてはならないことに気づき、次第に、自分自身で考えるようになったと思います。ただ、生徒の中には、探究の意義が分からずに、「どのようにしたらいいのか」といった生徒もいましたが、こまめに声かけをしていくことによって、少しずつではあるが、生徒自身も変わっていったように思います。

〈教員 B〉

①芸術（指導1年目）

②何かに興味がある生徒やいろいろな事柄に疑問を感じられる生徒は、生徒本人が行き詰まって悩んでいる場面でもこちらからの声かけもしながら進んでいってくれたが、そうでない生徒（特に何にも興味がない、課題研究という授業に対して面白さを感じていないように感じる）は、生徒自身が研究課題を決定していく時でも、自分事に捉えることができずにいたように思う。課題研究の授業の意義や目的をどのように伝えたら理解してもらえたのか反省点が残った。うまく伴

走できず、ほとんど調べ学習で発表を終えさせてしまった生徒もいました。

③自分の研究をどんどん探究していく生徒は、行き詰まったりして悩んだりする姿も見受けられたが、自分の研究テーマと真剣に向き合っているように感じました。本人と話をしてもワクワクしながらその研究へのこだわりを聞かせてくれていました。こだわりをもつ姿勢は最初の頃と比べると変わったように感じました。また1つの事柄に何かしらの疑問を見いだす習慣も少しはついてきたかと思います。

④もともと担当している専門教科は「答えのない」教科なので、影響し合える部分は多かったと思います。作品に対して、「なぜここはこんな風にしたの」や「この余白は何か意図したものなの」など自分が書いた作品に対して「なんとなく書いた」で終わらすのではなく、そこにどんなこだわりや意図があるのかを持ってほしいし、それを自分に問いかけながら制作してほしいと強く思うようになったので、質問などをしながら授業を展開するようになりました。また、自分で好きな作品を選んで制作する授業では、その作品についての歴史や背景、また作品から受け取ったイメージを文章にして、初めてその作品に触れる人にどのような作品か分かりやすく伝えようという新たな展開を取り入れたりしてみました。

〈教員 C〉

①理科・生物（指導2回目）

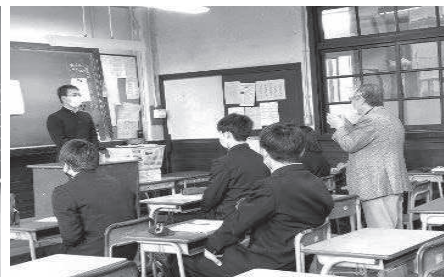
②昨年度は専門科目（生物）、今年度は科目に制限のない講座を担当しました。昨年度は専門科目ということもあり、研究課題の解決にむけて、最終は自ら実験を構築するということを目標としていました。しかし、決定したテーマや研究課題について、生徒がそもそも基本的な知識をもっていないことが多く、調べ学習や論文の検索に時間がかかり、目標達成がほとんどできませんでした。不完全なものとはなりましたが、受講していた者のほとんどが理系の学部に進学しようと考えていたため、こういったプロセスも大事ではあったと思います。科目の制限のない講座は、私自身があまり知らなかったような分野について、生徒が多様な話をもってくるので、本当にとともに疑問をもったり考えたりすることができました。生徒と一緒に模索していくことができたと思います。

③普段の課題研究以外の授業では教員から提示されたことを学習し、そのなかで自ら思考していくというスタンスの生徒が多いのではないかと思います。課題研究では、まっさらな状態から始まるので、その点が生徒にとっては新鮮だと感じます。自分は〇〇に興味・関心があると思っていても、調べを進めていくと、「案外自分は知らないことが多いな、本当にそこまで興味・関心があったのだろうか」と疑問をもち始める生徒も多くいました。本校では調べたことをきれいにまとめ、ある程度の形で発表できるといったような段階の生徒は多くいますが、ではそこから疑問をもち、その疑問から新しい考えが浮かぶといったような生徒は少ないように思います。結果として、課題研究が上手かった生徒はもちろんのこと、そこまで上手いかなかった生徒も、頭を痛めたり、考え込んだりした長い時間はとても大きな収穫になったと感じます。

(ウ) ポスター形式による「課題研究発表会」の実施

成果発表の機会として、令和3年4月には学校設定科目「課題研究α 選択者による課題研究発表会」、また令和4年2月には第2学年による「課題研究発表会」をそれぞれ実施した。双方ともにコロナ感染拡大防止の観点から、開催会場を本校文化創造館（講堂）から各HR教室及び特別教室に移し、聞き手の生徒を少人数のグループとしてメンバーを固定し、発表者が2人1組となって、各教室を巡回しポスター発表をする形をとった。発表をポスター発表形式とすることで、話し手は聴衆を理解しながら、会話方式で説明ができ、話し手と聞き手の対話が生まれていた。講堂でパネルを設置しての発表であれば、さらにその効果が期待できる様子が伺えた。4月の発表会については、3年生がこれから課題研究を実践する2年生を対象に発表をしたことで、発表者は1年間の振り返り及び今後の展望をもつ機会になり、2年生にとっては、課題研究における具体的なイメージを掴む機会となった。この時「聞き手」であった2年生が中心となり開催した「課題研究発表会」では、30名の代表者が、4月と同様の形で各教室を巡回する形で、1年間の成果を発表した。生徒たちは自ら選んだテーマについて今年度4月から約1年間かけて、それぞれが各自の研究課題に向き合ってきた。10分という限られた時間の中で、代表者はデータ分析から独自の考察、展望を語り、自分の研究を語るその生き生きとした姿、聴衆との対話を楽しむ姿が見られた。また聴衆として参加した2年生も、「よい聞き手」として真剣に発表を受け止め、活発に質疑応答ができていた。最後には、指導助言者として招聘した、関西学院大学元学長井上琢智様に全体を総括したご助言をいただき、生徒たちは真摯に受け止めることができていた。

本校では生徒たち自身の「主体的な研究課題の設定」を課題研究の一つの目標とし、たとえそのことに時間がかかったとしても、生徒たちが自分や仲間との対話、また教員との対話を通じ、自分が「なぜそれをしたのか」を考えた上で、言語化させる過程を大切にしている。その一部に、「課題研究発表会」が加わったことで、発表生徒たちだけでなく、聞き手の生徒たちにとっても「気づき」や「学び」の多い1日になったと言える。今回の代表者には、次年度4月に開催予定の「課題研究α 選択者による課題研究発表会」に、発表者としての参加依頼をしているところであり、学びの波及効果が期待される。



(写真は令和4年2月5日の様子)

(エ) 学校設定科目「課題研究α」

①設置の目的及び選考について

「課題研究α」とはアドバンストコースを選択した生徒が履修した学校設定科目である。所定の過程を修了したと認められる者には、第2学年の増加単位を1単位付与する。昨年度より「課題研究」が全員履修となったことにより、「課題研究α」選択者は、さらにもう1単位履修することで、高度で発展的な課題研究に取り組む。また地域の諸課題について、外部講師より学んだり、フィールドワークを実施したりするなど地域人材とも連携を取りながら、課題研究の深化を目指す。今年度は6月に募集及び選考を実施、7月末より活動を始めた。説明会には20数名が集まったが、実際の選考に臨む生徒が少なく、最終的に履修が決まったのは7名であった。活動の充実が図れるか心配する声もあったが、少人数ならではの機動力とチーム力を活かした探究活動が展開できた。

②フィールドワーク等の計画及び実施

今年度も、コロナ禍の中、各関係機関及び地域の企業様には、生徒の「研究課題」に関わるフィールドワークの実施にご協力を頂いた。コンソーシアム機関をはじめ、地域課題に取り組んでおられる企業様や、奈良から世界へ向けたメッセージを発信されている企業様に、生徒に直接お話をして頂いた。実際に取り組んでおられる方の声を聞くことで、生徒にとっては思い込みや想像ではなく、正しく物事を知り、さらに新たな問いが生まれる機会となった。以下に主な訪問先を記すとともに、ご協力頂いた方々に感謝を申し上げる。

○奈良県「三郷町の雪駄」の海外展開の現場を訪ねて

日程：令和3年8月19日（木）14：30～16：00

軽装履物（雪駄）の企画・製造・販売をされている株式会社 DESIGN SETTA SANGO 様を訪問し同社取締役 星田和彦氏から「雪駄を世界のスタンダードにする」というお取り組みの経緯及び開発途上で生じた様々な課題にどのように取り組み、世界へと発信されているかについてお話を伺った。なぜ「雪駄」を選ぶのか、またなぜその場所を選ぶのかについて、生徒たちに分かりやすい言葉でお話を頂いた。地場産業の継続的な発展について、考察する機会となった。



〈参加生徒の感想〉

- ・職人の方々が説明の中で繰り返し「はき心地」という言葉が使われた。細部にまでこだわった長持ちのする雪駄だからこそ（高価であるにも関わらず）たくさんの人に求められるんだなと思った。
- ・お話の中で「変化」や「革新」といった言葉に最も影響を受けました。私の課題研究において、「変化」がキーワードでもあるので、たくさんの具体例について話を聞くことができてよかった。

- ・古くからあるものと新しいものを掛け合わせることで、新しい価値を見いだそうとされていることが印象に残った。

○「ロスチェンジプロジェクト」から生まれた「kome-kami（コメカミ）」開発の現場を訪ねて

日程：令和3年8月25日（水）10：00～11：30

奈良市の紙卸売業を営む「株式会社ペーパー」は、創業125年を迎える老舗で、同社取締役の矢田和也氏は、廃棄米を利用して新たな商品に再生するという「ロスチェンジプロジェクト」に取り組みされた。クラウドファンディングで支持者を募り、生み出された商品が「kome-kami（コメカミ）」である。その開発に至る経緯や開発途上で生じた様々な課題にどのように取り組まれたのか、話を伺った。また、紙の卸売業というビジネス現場におけるCSR（企業の社会的責任）についても考える機会となった。



〈参加生徒の感想〉

- ・新しいことをしたい、今の状況や状態を変えたいという考え方で課題研究に取り組んでいる私にとって有意義な時間を過ごすことができた。「やりたい」という気持ちが最も大切だと思うけれど、それだけでは人はついてきてくれないので、客観的なメリットを自分の言葉で説明できなければならないと思った。まずは現状を正しく理解する必要性を感じた。
- ・講演のメモを見返すと「付加価値」を常に念頭において、開発・戦略を立てておられることが伝わってくる。あらゆる場面での「取捨選択」も重要視されており、先日のフィールドワーク（三郷町）においても感じたことであった。学生時代から社会人になってからのご経験も聞かせて頂いた。「粘り強く続けることの大切さ」を教えて頂いた。うまくいかずに終わってしまったこともあるとお話をしてくださったからこそ、印象に残った。

○国連世界観光機関（UNWTO）駐日事務所を訪ねて

日程：令和3年8月25日（水）13：30～14：40

国連世界観光機関（UNWTO）駐日事務所が推進する「持続可能な観光」とは何か、担当者から直接お話を伺った。まず、UNWTO 本部・アジア太平洋地域担当専門官の Ms. Oriane Derrier から同機関の役割や国際観光の動向と新型コロナウイルス感染症に対する UNWTO の取組について紹介があった。英語で進められたワークショップは、



生徒たちにとって楽しい情報共有の場となった。続いて、UNWTO 企画・渉外部担当の西原康平氏から「持続可能な観光」と地域経営・地域振興についてお話を伺った。数多くのスライドを活用しながら、「持続可能」が意味するところを具体的にわかりやすく示していただいた。

〈参加生徒の感想〉

・UNWTO における仕事の様子も伺い、国境を越えてともに働き、共通のゴールをもって仕事をする事は、とても楽しいことであると同時に難しいことでもあると思う。その中で、新しい価値観や考え方、方法などが次々生まれていくことに、不安や恐怖もあって当然だと思うが、それ以上に、このことに対する喜びを大事にし、受け入れられるようになることが大切だと思う。

・観光と地域振興を結びつけるお話で何度も「地域ブランド力」、「かけ算の発想」、「特色」という言葉を出されていた。これと同じようなことを「株式会社ペーパー」様でも伺っていたので、人の心をつかむことについては大切なことは共通しているのだろうと思った。他にも、「スクラップ&ビルド」は「DESIGN SETTA SANGO」さんで「伝統と革新のブレンド」などの言葉で表されていると気づいた。

③外部コンテスト等への参加（詳細については、第4章（2）に記す）

- ・2022 全国高等学校グローバル型オンライン発表会（英語部門「銀賞」を受賞）への参加（1チーム4名）
- ・総合的な探究の時間学習研究発表会及び WWL コンソーシアム構築支援事業課題研究発表会への参加（3名、3テーマ）

④「課題研究α」成果と課題

今年度は少人数でありながらも、それぞれの強みを活かした活動ができた。個人研究でありながらも「全員で『全員の個人研究』をする」姿勢は、昨年度から引き継がれたものであると感じる。互いの実践内容を共有しながら、高め合う姿勢が常に見られた。1年間の振り返りでは、やはり外部方々との交流などから、考え方やものの見方について大いに刺激を受けたという声が多く聞かれ、視点が豊かになることで、自身の成長が感じられたと話す生徒も多い。

課題としては、グローバルな視点を育む機会の創出が不十分なことにある。海外に直接足を運ぶことは難しい状況ではあるが、世代や国籍を問わず、他者と意見を交換する機会を十分に創出できていない。オンラインも含め、単なる交流にととまらず、生徒同士が取り組んでいることを共有し、異なる視点で議論できるような環境づくりを、海外交流アドバイザーや、コンソーシアム機関の協力も得ながら、生徒たちが学び続けられるように教員も支援を続けたい。

「課題研究α」については、本校のカリキュラムの特徴の一つであることから、より多くの生徒の履修が期待される。第2学年全員が「課題研究」を履修することになり、SGH 指定時とは異なる位置づけや校内での役割については一定の整理ができつつある。次年度の募集については、履修した生徒たちの力も借り、夏休みには充実した活動が開始できるよう計画をしたい。

（オ）事業終了後の自走に向けた課題の整理

課題研究については、ここからがその真価が問われる。課題研究が目的なのではなく、課題研究の取組の中で、生徒が学習と生徒自身の生活を繋ぐことより、自ら課題を発見して解決しようとする態度や考え方を育み、内発的で深い学びへの実現を目指したい。また課題研究と自らのキ

キャリアを繋げる意識等については、十分に実現できたとは言えず、教員もそのことを十分に理解しながら、指導に当たる必要がある。11月と2月に2年生対象に実施した「課題研究意識調査」からは、テーマへの関心、計画性、また情報整理等について、いずれも8割の生徒が肯定的な回答をしている。また独自のものを創り出す意識及び新しいことへの挑戦する気持ちについての質問にも6割近い生徒たちが肯定的な回答をしている。特に新しいものへの挑戦については、次のような記述が見られ、行動の変容も見られる。以下に一部を紹介する。

〈生徒の記述〉

- ・ これまでは与えられた枠の中で、何かを「こなす」だけだったが、その枠の外へ踏み出してみようと思えた。
- ・ 大学進学を「当たり前」と捉えてきたが、なぜそれを学ぶのかをあまり考えてこなかった。「なぜ」を問うことで、考えることができ、志望大学が決まった。
- ・ 部活動で、先輩も後輩も誰も挑戦したことのない大会に出場する決心がついた。
- ・ 課題研究を機に、自分が本当に何に興味があるか、徹底的に考えるようになった。 等

意識調査の結果からは、今後の展望が見えてきた。「課題研究のテーマ選択において、進路に関する意識が変わったか」という質問項目については、約4割の生徒が「強くそう思う」「そう思う」と回答している。本校では研究テーマを選択させる際に、あくまで生徒の主体性を重視している。各自の興味・関心領域と、社会とのつながりに加えて、本人の進路についても意識させているが、全ての生徒が、この3つの要件を満たしているわけではない。「課題研究」では、今現在、最も興味のあることに取り組むという生徒が多いのも事実であり、その結果、「問い」そのものが、社会との接点を十分に見いだせない状態の生徒もいる。そのことを教員も理解し受け止めながら、授業終了後も、取り組んだことを「自分事」として考え続けられる生徒の育成が求められる。また時間をかけて、生徒たちのキャリア設計に影響を及ぼす可能性も十分あるという認識も必要である。その上で、生徒の主体性は担保しつつも、校内で再度、生徒たちに取り組みさせる意義についても整理、共有をし、この一連の取り組みが「課題研究」で完結せず、「深い学び」につながるような環境づくりに注力したい。